

## バティック、東南アジアの豊穡

バティック (Batik) とはロウケツ染めのことで、この手法による染色は古くはエジプトや中国に遡ることができるが、何といてもインドネシアが有名だ。インドネシアでは 12~3 世紀あたりからの記録が残されており、王宮文化のなかで育まれてきた。それがはじめて西洋に伝えられたのが 1817 年といわれている。当時スマトラ州ベンクルの英国知事を務めていたスタンフォード・ラッフルズが本で紹介したのであった。インドネシアは 16 世紀よりポルトガル、イギリス、オランダの船が立ち寄りはじめ、17 世紀にはオランダ東インド会社の支配下におかれた。インドネシアはコーヒー豆や天然ゴムなどの農業資源にくわえて、金や石油などの鉱物資源にも恵まれていたため、交易で豊かになるにつれてバティック産業も発達していった。とはいつてもインドネシアの社会構造は、オランダ（一時は日本軍）統治の下に華僑商人や各地の王族などがつらなり、それらの下位にバティック生産者があった。

そもそもバティックは王宮装束のためにあり、庶民には使用が禁止されていた。しかし商品として売れるにつれて、北沿岸部ではヨーロッパ受けするデザインがオランダ人によって作られるようになった。日本統治下においては富士山や芸者をあしらったバティックも登場したらしい。バティックをあらためてインドネシア人のもとに戻したのが、長い外国支配からの独立戦争に打ち勝ったスカルノ大統領である。

スカルノは、ある会合で中国系インドネシア人ゴー・ティック・スワン (Go Tik Swan) に会い、インドネシア大学文学部であることや家業がバティックメーカー経営であることを知って、彼にインドネシアのための新しいバティック製作を託した。彼は国内の産地を調べあげて、王宮の伝統図柄と北沿岸部の華やかさを融合させた〈バティック・インドネシア〉を作り出した。国としても通産省で製造や管理にさまざまな規程を設けた。この伝統産業のナショナルブランド化の試みは、多言語で複数の王国の寄せ集まりであったインドネシアの、国家としての統一アイデンティティー確立にも役立つものであった。スワンについては Go Tik Swan Panembahan Hardjonagoro で検索すると人や作品をたしかめることができる。〈バティック・インドネシア〉以後、それに続くデザイナーやメーカーが次々にあらわれ、いまでも優れたバティック製品が生み出されている。

私がバティックをみて感じることは「東南アジアの豊穡」である。強い陽光、熱帯林、清らかな水、豊かな食生、柔和で勤勉な人々…、これらがバティック柄に凝縮されている。インドネシアに行ったときには土産にチャンチンとチャップを求めたし、シンガポールではキャップと図版集を買って帰った。バティックはインドネシアのみならず周辺国でも、それぞれのバティックをあらわせるところに、柔軟性や拡張性がある。下に各国の美しいバティック姿を載せる。



ナショナルフラッグ CA のバティック・コスチューム (ガルーダインドネシア航空、シンガポール航空、マレーシア航空)  
<https://balisuki.jp/useful/843-uniform/> <https://www.pinterest.jp/pin/553098397983739353/> <https://www.pinterest.jp/pin/787567053561453960/>

バティックを愛した偉人としてネルソン・マンデラをあげる。マンデラは言うまでもなくノーベル平和賞を受賞した南アフリカ共和国の大統領である。マンデラは法律を学び非白人の弁護士として初めて法律相談所を開設する一方、アフリカ民族会議に加わり反アパルトヘイト活動をした。しかし 40 代半ばの時に国家反逆罪で終身刑となり刑務所に収監された。やがて国内外の情勢も変わり、1990 年に刑務所から釈放されることになったが、27 年間におよぶ獄中生活のため70歳を過ぎていた。同年、アフリカ民族会議党首に着任してアジア諸国を訪問した。このときに立ち寄ったインドネシアで、スハルト大統領から記念にバティック・シャツが贈られた。

1994年、マンデラは南アフリカ共和国の大統領に就任した。そして1997年、今度は国賓としてインドネシアを再訪した際にバティック・シャツを着用した。そしてそれを迎えるスハルト元大統領はスーツ姿であった(図1)。アパルトヘイトで苦しい時代を過ごしたマンデラにとって、バティックによる正装は、白人社会のスーツばかりがスタンダードでは決してないことを示す矜持だったのである。以後、亡くなるまでマンデラはバティックを着続けた。

このマンデラのシャツのデザイナーがイワン・ティルタ (Iwan Tirta) である。ティルタの父はインドネシア最高裁判所判事で、その末っ子として1935年中部ジャワで生まれた。子供のときは外交官を夢みていたが、父のすすめでインドネシア大学で法学位を取得して国際法の教授になり、ロンドン大学経済学部と東洋アフリカ研究学院に留学するためにイギリスに移った。そして1964年、イェール法律学校で法律を学び、ニューヨークの国連本部に数年間勤めた後、1970年にニューヨーク市からインドネシアに戻って、突然、バティックの研究・デザイン・商品開発に専念するようになった。ティルタは生地幅を40インチから58インチに拡張したり、大胆なデザインやシルクも採用したりと次々に斬新な試みをして、バティックを国際的なファッションの舞台に持ち上げた。ちなみに1994年、インドネシアで開催されたアジア太平洋経済協力サミットで、来賓指導者たちが着用するバティック・シャツをデザインしたのもティルタである。

残念なことに2010年、ティルタは中央ジャカルタの病院で75歳で逝去、2013年にはマンデラも95歳で逝去した。マンデラとティルタはともに弁護士出身、心底で結び合うところがあったに違いなく、マンデラはティルタのバティックを愛用し続けた。

2009年10月2日、バティックはユネスコの無形文化遺産に認定された。そのためインドネシアでは10月2日をバティックの日と定めた。また毎週金曜日には公務員や一般の会社員などがバティックを着るなど、国内での需要および伝統産業保護に努めている。



図.1 マンデラを迎えるスハルト元大統領 1994年  
<http://honesia.doorblog.jp/archives/34933449.html>



図.2 ティルタと会社のロゴ

<https://lifestyle.okezone.com/read/2010/02/01/29/299746/larik-batik-di-atas-keramik-ala-iwan-tirta>